

つたが、実際に日本語をコンピュータで処理するためには、日本語の表記や文法のシステムとコンピュータの処理システムとの関わりを研究する必要に迫られ、欧米の言語の場合とは異なる日本語独自の問題についても多彩な研究が展開された。日本語入力における仮名漢字変換システム、形態素解析・構文解析・意味解析に基づく機械翻訳・自動要約・音声認識システムなどがその代表的な成果である。こうした研究は、主に工学者によって進められてきたが、漢字処理のための標準漢字表(JIS漢字)の整備には日本語学者による漢字研究の成果が生かされ、形態素解析・構文解析の技術には用語学調査や日本語文法研究の成果が取り入れられている部分もある。しかし、総じて、日本語学者の参画は不十分で、日本語学の観点からの、コンピュータと関連づけた日本語研究の本格的な展開は、今後に期待されるところが大きい。近年、日本語学においても進展が見られるコーパス言語学は、工学技術を言語研究に生かす方向に向かっており、日本語の記述研究を精密かつ見通しよく進めることが期待でき、また、日本語研究の成果を言語教育や辞書編集などに応用しやすい性質をもっている。コンピュータのもつ能力を十分に生かした日本語研究の新しい研究領域を開拓していくことが課題である。

【参考文献】 国立国語研究所『電子計算機による国語研究Ⅰ』(昭43、55)。長尾真編『講座 ソフトウェア 科学15 自然言語処理』(平8)。長尾真『人工知能と人間』(『岩波新書』平4)。土屋俊『A J事典第2版』(平15 共立出版)

## 文化人類学

ぶんかじんるいがく

【解説】人間の社会的文化的生活の過程とその仕組みを説明しないし解釈することを目的とする社会科学の一分野。最大の特徴は、文化の多様性という視座の中で人間を捉えることである。人類社会は、数百万から十数億人まで人

口的に様々な集団として、極端から熱帯に亘る多彩な自然環境と、農村から都市における多岐にわたる社会環境において適応、生活している。文化人類学は、この極めて多岐にわたる個性をそれ自体の解明を通して、人間の経験の多様性と豊穡性について理解する。同時に、それらを貫くような人間社会にみられる普遍性をも探求する。個別の社会文化現象に対する綿密な考察こそが、人類全体像の理解へと連なる一これが文化人類学の公準である。人間の普遍性探求の方法は二つある。第一は、諸集団の行動や規範にみられる相似・相違の現象を集積、類型化し導くものである。そこから家族・親族、社会、経済、政治、宗教現象に関わる人類学の基礎概念が構築される。これはいわば個別事例の集積とその標準化によってなされるが、第二の方法は事例を枚挙し、分析・解釈するものである。既存の人間の社会文化過程の常識を揺るがすことによって、そこに普遍性を垣間見ようと模索することである。個性と普遍性の探求とどちらに重点をおくかは研究者によって異なるが、個性を重視する立場は文化相対主義と呼ばれる。そこで個性はそれぞれ価値があり独自に理解されうるべきものと見なされ、自民族中心主義など絶対的価値観・尺度は否定される。人間の社会的文化的生活の過程における個性を理解する上で、文化の概念は重要であり、人類学の根幹に関わっている。文化を把握するためには、時間と空間の位相を考慮した上で、諸個人の行為・発話に着眼し、それらを超えた社会的事実の存在を認める必要がある。その定義は、一九世紀後半のE・タイラーによって示された「知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習その他、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や習慣の複合総体」に遡る。その後、文化を、自然環境に対する技術・生業適応の体系として、あるいは認識・知覚・行為に関わる概念体系として捉える立場が出現した。そこには文化の

法則が説明可能であるという前提があった。二〇世紀後半にC・ギアツはこれを転換し、文化とは人間自らが紡ぎ出した意味の網の目であり、その探求とは、ある特定の個人や社会的集団によって担われる象徴及び意味の解釈に他ならないと主張した。人類学成立初期から内包されていた人文主義的志向は、ここで影響力を強め、ポスト構造主義の現代人類学に至っている。もう一つ重要なのは、人類学の元来の研究対象が「未開人」と概念化された非西洋の人間集団だったことである。その後、研究対象は「文明社会」・自文化集団にまで拡大したが、対象をいずれに据えるにせよ、「他者なる文化」という視座は人類学的思考の根底に横たわっている。人類学者が「他者」の視点からあえて問題化するのには、個別の文脈において常識化・身体化された行為・発話である。それらの機能と意味は、諸文化と比較され、差異の相互関係から定位される。その過程において、ある特定の社会文化的過程は、その担い手によって自覚され、価値付けられるような事件として分析される。と同時に研究者によって想定された普遍的概念によっても吟味される。この点で個性は、相対的に位置づけられ、常に既存の分析枠組み自体を再考させる媒体なのである。文化人類学において理論を産みだす源泉は民族誌と呼ばれる。これは個性の解明という人類学の目的に直接関わる洞察を必然的に含むという意味で、単なる記述資料を超えたものとなっている。民族誌は、特定の社会的集団を選択し、長期間の参与観察に基づくフィールドワーク(臨地調査)を実施した上で叙述される。二〇世紀初頭にB・マリノフスキーによって確立されたこの方法は、職業的人類学者の入信式とされるほど重要であり、同時に主として定量的資料に依存する他の社会科学に対し人類学の独自性を際立たせている。【研究史】米国において文化人類学と称されるこの分野は、英・独・仏で民族学ないし

社会人類学と呼ばれているが、その中味は現在ほぼ同じである。民族誌を分析する際に基礎となる理論は、進化主義・伝播主義・機能主義・構造主義・解釈人類学・記述行為としての人類学と展開してきた。ロシアはかつてソビエト民族誌学というマルクスレーニン主義に基づく独自の理論を展開した。東アジアにおける人類学は、自国の国民統合と文化の関係という問題を通して、個性の探求に焦点をあてる傾向がある。日本文化人類学でもその初期の課題は民族文化形成論だったが、その後日本民俗学との分裂をへて、欧米人類学理論を取り込みながら世界各地で現地調査を実施するようになった。生態人類学分野をはじめとして独自の理論展開と方法論の開発もみられる。

### ■ 民俗学

みんそく

【解説】 世代を超えて受け継がれる生活文化(民間伝承)民俗を研究する学問。かつては、民俗の歴史の変遷や由来、あるいは民族性(エトノス)を明らかにすることが目的とされていたが、現在は、その学問の方向性は多様化している。民俗とは、一般には、ならわし・習慣・習俗・風習・風俗・慣習・慣行・慣例などと表現されるもので、いずれも世代を超えた、時間的連続性をもって伝えられる文化の特徴を指し示す。ただし、民俗の所在は、あくまで「民」にこそある。すなわち、民俗という言葉には、普通の人々の日常生活に存在する文化が指定されており、同じく超世代的に継承されうる法律制度などとは区別されているのである。そのような日常生活文化を取り扱う民俗学において、日常生活のなかで伝承される言語は、当然、重要な素材であった。たとえば、民俗学の創始者である柳田国男は、民俗資料を分類するなかで、「言語芸術」を重要な三分類の一つとして画定している。

【解説】 世代を超えて受け継がれる生活文化(民間伝承)民俗を研究する学問。かつては、民俗の歴史の変遷や由来、あるいは民族性(エトノス)を明らかにすることが目的とされていたが、現在は、その学問の方向性は多様化している。民俗とは、一般には、ならわし・習慣・習俗・風習・風俗・慣習・慣行・慣例などと表現されるもので、いずれも世代を超えた、時間的連続性をもって伝えられる文化の特徴を指し示す。ただし、民俗の所在は、あくまで「民」にこそある。すなわち、民俗という言葉には、普通の人々の日常生活に存在する文化が指定されており、同じく超世代的に継承されうる法律制度などとは区別されているのである。そのような日常生活文化を取り扱う民俗学において、日常生活のなかで伝承される言語は、当然、重要な素材であった。たとえば、民俗学の創始者である柳田国男は、民俗資料を分類するなかで、「言語芸術」を重要な三分類の一つとして画定している。

教・歌謡・俚諺・謎・呪文・言葉遊び・童言葉などの口承文芸を意味し、民俗学の重要な研究分野として位置づけられている。【研究史】世界的に民俗学を眺めるならば、一九世紀初頭のヨーロッパにおける、産業革命による近代化、それにもなう伝統的生活文化の消失・衰微と、反作用としてのそれらへの関心の高まりが、その学問の端緒であったことが理解できる。たとえば同時期、ドイツでは、『子供と家庭の童話(いわゆるグリム童話)』(Grimm)を編纂したグリム兄弟が、ドイツ語学研究を起点に口承文学の研究を開始した。また、イギリスでは、トムズが民衆の風俗や文芸を総称するフォークローレ(Folklore)という用語を作り、一八七八年に、世界最初の民俗学会を設立した。日本における民俗学は、遅れて二〇世紀初頭、柳田国男により創始され、彼を中心に発展してきた。昭和二年(一九二七)、柳田は、民俗の分布と歴史の変遷を関連づける重要な仮説を提示した。柳田は、その三年後、この仮説を『蛸牛考』(昭和五)を発表する。それが、民俗学的な方言分析の仮説として著名な方言圏論である。方言圏論は、後に柳田の周りの研究者たちによって、圏論として言語以外の民俗事象の資料操作にも応用された。圏論は、「文化は、その発生地となる中心地から同心円状に伝播するため、周縁地域の文化ほど古い状態を示す」という仮説である。彼は、カタツムリ(蛸牛)の方言に注目し、東北北部と九州西部でナメクジ、東北と九州でツブリ、関東や四国でカタツムリ、中部や四国などでマイマイ、そして近畿でデデムシというように、京都を中心として列島の周縁に向かって、デデムシ系、マイマイ系、カタツムリ系、ツブリ系、ナメクジ系のカタツムリの方言が順次分布することを明らかにした。これにより、柳田は、文化を生ずる中心地としての京都で、カタツムリの呼称がナメ

化し、それぞれが列島を伝播したために、新しい系統が京都に近い地域に、古い系統が離れた周縁部に残存していると考えた。方言の分布をもとに、過去の言語の変遷史を再構成するこの手法は、言語地理学の嚆矢ともいえる斬新であったが、この仮説を言語以外の民俗へ応用することには成功しなかった。また、方言研究の分野においても、言葉の担い手(子供か大人か)や発音・アクセントの相違に注目すると例外が多く見られ、方言についても必ずしも周縁的に分布するわけではないことも指摘されている。【課題】民俗学は、民俗を伝承する母体である社会の近代化、都市化にともない、対象とする伝統的な民俗の大きな変容と消失の危機に直面している。民俗学における「言語芸術」も同様の状況にあり、それらは質・量ともに大きな変化を遂げている。一方、都市部を中心に、かつて伝承された民俗とは異なった、都市伝説や世間話といった新しい口頭伝承のジャンルも生み出され、多くの民俗学者によって注目されている。それは、従来の民俗学が考えてきたような「言語芸術」と類似した構造やモチーフ、類型を持つ場合もあるが、基本的に世代間を口承で伝えられるものではなく、同世代の集団のなかでときおり創出され、増幅され、伝播されるものである。また、マスメディアを通じて、地理的に離れた場所まで広範かつ迅速に広められる点で、従来の「言語芸術」とは大きく異なっており、新しい対象を検討する新しい方法と視角が、いまの民俗学には求められている。

【参考文献】 柳田国男『民間伝承論』(昭和9共立社)。  
柳田国男『蛸牛考』(昭和5刀江書院)。  
J・H・ブルンヴァン『ドーベルマンに何があつたの?』アメリカの「新しい」都市伝説(行方均訳、平9新宿書房)。

菅 豊

# 日本語学研究事典

編者◎飛田良文 [主幹] 遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺 [編]

The Research  
Encyclopedia of  
Japanese  
Linguistics

◎Editors  
Yoshifumi Hida  
Yoshihide Endo  
Masanobu Kato  
Takeyoshi Sato  
Kiyoto Hachiya  
Tomiyoshi Maeda



明治書院  
Meijishoin Co., Ltd

2007年